

〔講演要旨〕

『新選和漢合図』にみる地震・噴火

片桐 昭彦(新潟大学人文学部, 災害・復興科学研究所)

§1. はじめに

本報告では、『新選(新撰)和漢合図』という年代記を取り上げる。『増訂大日本地震史料』に収載される『新選和漢合図』の地震関連記事は、彰考館文庫所蔵の写本(以下、彰考館本と略す)を出典とする『大日本史料』『大日本史料稿本』に拠ったとみられるが(片桐2022),彰考館本は1945年に焼失したため検討できない。しかし、国文学研究資料館所蔵(川瀬一馬氏旧蔵)の写本(以下、国文研本と略す)があることがわかった。そこで本報告では、国文研本を史料学的に検討し、信頼性の高い地震・火山噴火の関連記事を抽出する。

§2. 国文学研究資料館本の成立と撰者道器

国文研本は、継体天皇14年(520)から天和3年(1683)まで干支が記されるが、年代記としての記事は慶長6年(1601)で終わる。表紙と巻末注記から、永禄4年(1561)8月に撰者道器が自筆した原本を、上野国箕輪で本人か誰かが書写したものを、慶長11年(1606)正月に同国二間在家の智善が、「貴屋良山信士」の菩提のために書写したものであることがわかる。

内題に「新選和漢合図下」、次の行に「鎮西梁山沙門 蓬庵叟 釈道器謹図」と記される。撰者の道器は、同撰の『難経蓬庵抄』(京都大学附属図書館所蔵)の序文等によれば、天文13年(1544)、39歳時に肥後の禅宗寺院大慈寺(現熊本市)の僧侶であった。一方、道器は天文7年以前には下野の足利学校におり、永禄13年(1570)に草した『周易筮儀私記抄』(叡山文庫真如蔵所蔵)の序文末には「釈道器謹草于東上陽赤城山下」と記される(鈴木博 1976)。また、天台宗の僧天海の『東叡山開山慈眼大師伝記』等によると、永禄7年(1564)に天海は上野新川の善昌寺(現群馬県桐生市)で兼学の才に誉れある道器に首楞嚴經・易経を聴講したとされる。すなわち、道器は30代前半を足利学校で学び、その後、肥後大慈寺に滞在し、永禄4～13年頃には上野国内にいたと考えられる。

§3. 国文学研究資料館本の地震・噴火関連記事

地震・火山噴火関連記事は、①斉衡2年(855)5月5日条「五五、大地振、東大仏ノ頭落地ス」、②仁和2年(886)7月27日条「七廿七、大地震、土州ニ五台山湧出」、③仁和4年(888)8月4日条「八四、大地震、一日ニ五度」、④治暦4年(1068)7月晦日条「七晦、大地震」、⑤正応6年(1293)2月13日条「二十三、大地震」(4月ヵ)、⑥正中2年(1325)10月21日条「十廿一、大地震、同廿二、雷鳴」、⑦観応3年(1352)2月19日条「二十九、將軍塚鳴動」(2年ヵ)、⑧延文5年(1360)6月24日条「六廿四、大地震」、⑨嘉吉2年(1442)10月20日条「十廿、大地震、伊豆大嶋地才湧出」、⑩宝徳2年(1450)条「信州浅間嶽獄火」、⑪享徳3年(1454)10月23日条「十廿三、大地震」(11月ヵ)、⑫長禄元年

(1457)7月21日条「七廿一、吉田社鳴動」、⑬長禄3年(1459)条「多田厩震」、⑭文明2年(1470)12月6日条「十二六、内侍所鳴動」、⑮文明4年7月3日条「七一二三、多田厩鳴動」、⑯永正8年(1511)8月7日条「八七、大地震」(7年ヵ)、⑰天文3年(1534)8月25日条「八廿五、浅間嶽鳴動、自夫年中大猛火」、⑱天文4年正月2日条「正二、自浅間嶽炭降東国」、⑲元亀3年(1572)10月5日条「十五、浅間嶽鳴動焼、灰降三寸」、⑳慶長2年(1597)3月1日条「三一戊時、浅間嶽動大焼、黒煙霰関東、其煙中ニ在猛火、前代未聞」、㉑同3年条「去年四月自六至八、浅間嶽、雖然四八ニハ毎年詣就之數千人參詣ス、然処猛火利那ニ出數百人焼死也」である。

§4. 地震・火山噴火関連記事の史料学的検討

上記記事のうち、①、②、⑦、⑧、⑫～⑯は『皇年代記』(龍谷大学図書館所蔵)の記事と共通し、文言もほぼ同じである。道器は永禄4年までに『皇年代記』龍谷大学本と同系統の年代記を典拠としたとみられる。

③～⑥、⑨～⑪、⑰～㉑の記事は典拠不明である。⑤が4月の写し誤りであれば、『鎌倉年代記』『武家年代記』『神明鏡』等の東国の年代記を典拠とした可能性があり、③、④、⑥の記事も未知の東国の文献等を典拠とした可能性がある。⑨、⑩は東国の伊豆・信濃の記事である。国文研本は応永23年(1416)条「上杉禅秀謀叛」以降、関東や信濃の政治事件の記事が増加する。道器が足利学校や上野の滞在時期に伝聞・収集した地域オリジナルの情報に拠ったとみられる。そのなかに㉑の享徳3年地震の記事も含まれる。

⑰～㉑の記事はいずれも浅間山噴火の記事である。⑰・⑱は時期的に道器が実際に見聞・伝聞した同時代の記事であり信頼性が高い。⑲～㉑は道器の自筆原本を最初に書写した者あるいは智善が加筆した記事、すなわち同時代史料であり信頼性が高い。

§5. おわりに

国文研本の⑨～⑪、⑰～㉑の地震・噴火関連記事は信頼性が高い。一方、彰考館本は、『彰考館図書目録』に「蓬庵叟釈道器図 永禄八年七月」と記され、国文研本の4年後に書写、加筆したものと考えられる。実際に『大日本史料』『大日本史料稿本』に収載される彰考館本の引用記事と、国文研本の記事とを比較すると、彰考館本には、応永32年(1425)11月5日「十一月五日、大地震」、天文23年(1554)5月「自五月白山焼失」などの記事があるが、国文研本にはない。

(参考文献)

片桐昭彦「東国の年代記にみる15世紀の地震」『第10回歴史地震史料研究会講演要旨集』新潟大学、2022年
鈴木博「医学の抄物二三——栢・道器・玄朔——」同『室町時代語論考』清文堂出版、1984、初出1976年